

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號二第卷一十五第

月八年五十和昭

哀辭 故財部教授遺影署名及原稿

論叢

支那の農家負債と農地の抵押……………經濟學博士 八木芳之助
水産資源の保全について……………經濟學博士 蜷川虎三

時論

東亞新秩序建設と新國民政府の發展性……………文學博士 矢野仁一

研究

民國初期の兌換券……………經濟學士 徳永清行
自由貿易主義の吟味……………經濟學士 岡倉伯士

記事

財部教授逝く
故財部教授年譜及著書論文目錄

追憶文

神戸 正雄 本庄榮治郎 蜷川 虎三
木村喜一郎 吳文炳 宗藤 圭三
青盛 和雄 松岡孝兒 石川 興二
黒正 巖 藤本幸太郎 谷口 吉彦
岡崎 文規

附錄

彙報
外國雜誌論題

愚 草

菊田 太郎

前回の御大患の経過に徴し、病氣自體は重くとも、旺盛な氣力を以て克服される事と信じてゐた所、意外に早く薨去せられ、風樹の歎なきを得ない。御十日祭に相當する今日、こゝに短文を草し、足らざりし奉養のせめてもの補としたい。

先生が博覽強記の文字そのまま、人間業とは思へぬスピードで、古今東西の典籍を讀破し、その内容を消化、利用されたことは、周知の事實であるが、博識を綜合・驅使する識見に於いて一層偉大でゐられた。例

へば、大學教授の一任務は、各種の意見、知識をそれ／＼適所に位置付け、識見を以て之を統合することゝされ、白石・春臺の所論、孟子・朱子の遺文、スミス・マルサスの著述から、新聞の雜報に至るまで、悉く藥籠中の適當な個所に收まり、隨時先生の用を辨じた。

屢々數頁にも互る長い引用は、單なる祖述ではなくて嵐山・叡峯そのまゝを庭園の一部とするにも似た氣宇識見、手腕の現はれである。そして、かゝる高邁な識見は勿論、天授であらうが、一面何か一事物に遭遇するとき、その比較物・對立物を求め、兩者を一層高遠な見地から綜合統一すると云ふ一種の辨證法で、育成せられたらしい。北海道の御話にはハンチングトンのニュー・ファウンドランド論が出、自分がチヌーネンに熱中すれば、「チーヤが宜しい」と仰しやるので、迂い自分は屢々間誤ついたが、これらは、何れも辨證法の前後を略し、中段のみを示すと云ふ氣の早い御指導であつたと解される。

氣が早いと云へば、先生の識見は、遠く時流を抜く

追　憶　文

と同時に之に先んじられ、卒然承はる際には要領を得兼ね、時を経た後漸くにして驚歎、敬服するに至つたことが實に多い。國民の保健・榮養・廢物利用、我が國の自然特に氣候變動と經濟との關係、印度の社會、經濟等々を問題とし、研究されたのが、それであつて日支事變が七月に勃發した昭和十二年には、四月の新學年早々から、演習に代へて、支那の經濟・社會に關する史觀を講義せられた。序ながら、本講義は例によつて大規模で根本的な外、我が儒者の研究成果が驅使されてゐる點、世に比類なきものであらう。

之を好むに如かずと云ひ、格物致知とも聞くが、先生は學問を尊重すると共に愛好され、御専門の統計・經濟は固より、天文・地理・水産・本草・割烹・遁甲に至るまで、究められざるはなかつた外、屢々觀察・實驗し、また終始實踐された。近藤兄は先生の不動金縛り術の實驗に御伴されたさうなが、東大の上野教授を主賓として樂友會館で開かれ、自分も御手傳を兼ね席末に陪した晚餐會では、御祕藏の本草書を展觀され

第五十一卷　二四九　第二號　一一五

追憶文

ると同時に、本草學から割出して、前菜からデザートまで全部のコースを精進の洋食とし、都ホテルのコツクを指圖して調理せしめられた。こんな御馳走は、眞に前代未聞たる許りでなく、將來もあり得ないであらう。なほ、これ亦序ながら、先生の御酒は、世に名高かつたが、下戸の自分の見る所では、單に長いだけで、御強くはなかつた。

水産に興味を有せられた關係から、白濱の臨海研究所、或は堺の水族館へ一度行きたいとの御氣持があつたけれども、大患後の御疲勞で、その機會は來なかつた。自分は、支那旅行中、先生に御伴してであれば、これだけ有益且つ愉快であらうと、幾度か思つたが、この希望は永遠に實現し得ない事となつた。嘗て白濱の貝殻の標本を呈し、御病中を支那風物の繪葉書で御慰めした許りであり、今日到着した荷物中の徐家滙版の太極圖説はもはや詮なし。この上は、先輩の驥尾に附して、先生の遺教擴充に碎身し、業績を以て報恩の微意を現はす外はない。あゝ!!